

スポーツが与えてくれる 人間的な成長、喜び

岡澤 特に大きな一つが自分に對しての自信です。目標を設定し、そこに向かって努力し達成する。それによって自分自身に自信を持つことができ、

スポーツ以外の分野でも、自分を信じて挑戦できるといふようになります。また、そのプロセスでできた仲間や、受けた応援・サポートはかけがえのない財産です。自分が愛したスポーツを一



三浦里佳子選手(山形市出身)
平成元年生まれ。日本体育大学在学中の2008年に日本代表に初選出。卒業後は白鷗女子高等学校に体育教師として奉職。自らは日体クラブに所属し、2014年に開催されたアジア競技大会ではチームの守護神として銀メダル獲得に貢献。

生懸命やることで誰かが喜んでくれる、そして本気で応援してくれるというところが何より幸せだと感じています。

中村 私は運動が苦手でした。そんな中で見つけた自分に合ったスポーツがアーチェリーです。一生

懸命やれば結果が付いてくるのが嬉しくて夢中になりました。国際大会に出られるまで成長できたのは、楽しむ心や夢中になれた結果だと思っています。

三浦 目標に向かって自分のできることを毎日積み重ねてきたことで、結果を出したときの嬉しさや楽しさを経験することができました。また、水球を通して、うまくいかないときも挫けず前向きに取り組むことの大切さを学びました。
鈴木 さまざまな国に行くことができ、その国の文化に触れたことや、目標を達成するにはどのようなことをしたらいいかを考えられるようになりました。僕にとってスポーツは、自分を謙虚にさせてくれる存在です。

高梨 地道な努力がカタチとなっ

です。勝ち負けだけではなく、感謝の気持ちや謙虚な姿勢、目標に向かって努力する事、多様性への理解など、多くのことを学びました。楽しい事ばかりではないですが、人として成長させてくれる、そんな魅力がスポーツにはあると思います。

知事 仲間やライバルとの出会い、失敗や挫折からの学びなど、

スポーツが自分を成長させてくれる大きな力となっていて、皆さんに共通する部分だと感じました。

ところで、皆さんは試合や練習の時に励みになった県民からの応援であったり、山形のこれを食べ

て元気になったというエピソードはありませんか？

故郷山形からの 応援や支援が励みに



高梨健太選手(山形市出身)
平成9年生まれ。山形城北高校を経て日本体育大学へ。2015-2016年にU-21日本代表選出。2020年に日本代表初選出、翌2021年も選ばれ、東京五輪代表最終メンバーに。V.LEAGUE Division 1のウルフドッグス名古屋所属。

ベーションになりました。
中村 地元鶴岡を拠点に練習しており、練習中に市民の方々に声を掛けていただく場面がたくさんありました。その応援の声が後押しとなり「頑張ろう！」という気持ちになりました。

三浦 試合前に、家族と小さい頃からお世話になつていてる方たちから動画でのメッセージを頂いたことが嬉しかったです。

鈴木 中学時代の友達や、幼なじみの友人から応援動画が届き、と

て結果が出たとき、嬉しさが込み上げてきます。たとえ苦しい練習でも、それによって得られる喜びや嬉しさがあるからスポーツはやめられません。

東海林 日々の練習はともきついですが、その積み重ねがあつたからこそ今の自分があると思つています。スポーツは自分が成長するために必要なものです。また、海外の選手たちと言葉は通じな



鈴木透生選手(山形市出身)
平成11年生まれ。大学生主体の世界ジュニア選手権代表に高校生で選ばれるなど活躍し、日本体育大学1年時に日本代表としてワールドリーグ出場。2018年日本選手権で2位、2019年には日本学生選手権で優勝、2020年日本選手権3位。

禍の前は)ハイタッチやハグでお互いを讃えあい気持ちを通じあえたことは、かけがえのない経験です。これまで、成功よりずっと多くの失敗がありました。失敗は成功のもと」と自分に言い聞かせて、繰り返し挑戦してきました。以前に比べると、トラブルが起きてもあまり動揺せず、平常心を保

でも力になりました。山形の食べ物では、ずんだ餅や納豆餅を食べて、パワーアップしました。

知事 山形は自然が豊かで、食べ物なら何でもおいしい。そして、人情味があつて人に優しい県民性です。特に今回は、史上初めて無観客での開催となつた大会でしたから、応援に行きたくても行くことができなかつたんですよ。

高梨 山形にいる家族から毎日「山形県の皆さんが応援してくれてるよ！こんなに盛り上げてくれるよ！」という連絡をもらい、その期待に何とか応えたいという思いでした。

帰省したときに母親が作ってくれる芋煮を食べると、山形に帰ってきたな...とほっとした気持ちになります。



東海林大選手(山形市出身)
平成11年生まれ。上山高等養護学校1年時にJSCA全国知的障害者水泳競技大会で自由形2冠を達成。2019世界パラ水泳選手権大会では100mバタフライ3位、200m個人メドレーでは世界新記録で優勝。

てるようになってきました。齋藤 私にとってスポーツは、人とのコミュニケーションツールだと思つています。近年では、ネットやSNSなどの普及で海外の情報があつても簡単に得ることができ

ますが、直接触れることはまだ難しい部分があります。私は、パラスポーツに出会えたことで、海外の選手とも接点ができ、異文化を知ることがとても楽しいと思うようになりました。
太田 私はスポーツに育てられたと言つても過言ではないと思つています。生まれた時から障がいと共に生きてきました。前に行くことが苦ではなく、自分をありのまま受け入れられるようになりました。
竹井 私にとっては、"人生の学校"

東海林 母校の横断幕は、これまで頑張ってきたことが認められたようでとても嬉しかったです。自国開催でメダルの期待が大きくなり、プレッシャーに押しつぶされそうでしたが「結果は気にせず自分が持っている力を最大限に発揮してほしい。」という言葉をもらい、自分のやるべきことがハッキリと見え

ました。
齋藤 大石田町の小学校、中学校、同級生からそれぞれたくさん祝福メッセージを頂きました。一つずつ

読んでいくうちに、パラリンピックへの挑戦権をつかんだ実感が湧いてきました。
太田 「応援する会」を発足いただき、激励会では保育園や母校の関係者を始めたくさんの方から励ましを頂きました。また大会後には

5 県民のあゆみ 1月号